1. 学級規模が児童生徒に与える影響に関する先行研究
（1） 実験的研究

米国テネシー州のスター計画（Student Teacher Achievement Ratio）

- 学級規模の関する研究のうち，唯一の大規模な実験的な研究。
- 1985年から1989年の5年間，幼稚園から小学校第3学年の4年間にわたる縦断的な研究を行い，児童ー教師比 (pupil-teacher ratio) が学力に与える影響を検討。
- 米国教育史上もっとも重要な実験の一つであると評価されている（Mosteller, Light, & Sachs, 1996）。

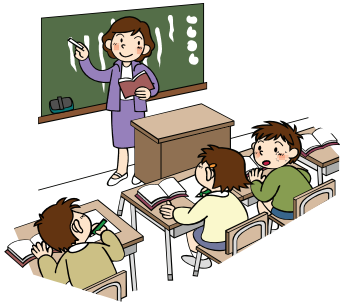
学級規模	対象学年	対象校	結果
22～27名 →13～17名	就学前,小1, 小2,小3	地域類型ごとに割り当て	• 学力調査の結果は，小規模学級が通常規模学級を上回る（Word, Johnston, Bain, Fulton, Zaharias, Achilles, Lintz, Folger, & Breda, 1990)。 • 3年生で小規模学級に割り当てられることが4，6，8年生時の学力テスト得点向上に寄与（Nye & Hedges, 1999）。 • 就学前から3年生までの4年間を通して小規模学級に在籍することが，4，6，8年生時の学力テスト得点のさらなる向上に寄与（Krueger, 1999）。 • 3年生までに小規模学級に在籍した児童は，4年生になっても授業中積極的に学習活動に参加（Finn, Fulton, Zaharias, & Nye, 1989）。 • 小規模学級では一斉指導に要する時間が少なくなり，児童が議論する時間を多く持つことができ，授業態度が悪い児童に対しても即時に対応できるといった利点（Johnston, 1989）。 • 小学校低学年において3年以上小規模学級に在籍することが高校卒業率を高める（中途退学が少ない）ことにつながっており，特にその傾向は給食費無料の生徒において顕著（Finn, Gerber, & Boyd-Aaharias, 2005)。 • 小規模学級に割り当てられた教師を対象とした聞き取り調査を行った結果，小規模学級では協同的で，児童が互いに助け合うような雰囲気があり，児童どうしのまとまりが強い（Johnston, 1989）。

1. 学級規模が児童生徒に与える影響に関する先行研究
（2） その他の研究

実証研究	小規模学級ほど学習態度がよい	英国	就学前	20名以下学級と30名以上学級を比較したところ，20名以下学級の方が立ち歩きや学習活動と関係のない行動をとることが少ない（Blatchford, 2003）。
		米国	小2	20人規模学級と35人規模学級を比較した結果，20人規模学級の方が学習課題に取り組む時間が多く授業中断時間が少ない（Cahen, Filby, McCutcheon, & Kyle, 1983）。
		米国	小3	20名以下学級とそれ以上の規模の学級を比較すると，20名以下学級の方が児童を静かにさせたりといった授業規律の維持を促すことにかける時間が少なかった（Stasz & Stecher, 2000）。
		豪州	小5	学級規模が小さいほど授業規律の維持を目的とした教師の働きかけが少ない（Bourke, 1986）。
		米国	高校	教師一人当たりの生徒数が少ないほど授業規律の維持を目的とした行動にかける時間が少ない（Rice, 1999）。
	小規模学級ほど雰囲気が落ち着く	米国	小1～3	小規模学級の担任の方が学級の雰囲気が落ち着いていると回答する割合が高い（Chase, Mueller, & Walden, 1986）。
	小規模学級ほど向社会的行動が多く見られる	米国	小3	小規模学級と通常規模学級の両方がある学校の教師を対象に調査を行ったところ，小規模学級の方が児童どうしが互いに励まし合うといった向社会的行動が多く見られる（Finn, Forden, Verdinelli, & Pannozzo, 2001）。
	小規模学級では競争や排他的な行動が少ない	米国	小3	教師調査を行った結果，規模が縮小された学級の方が，他者と競い合うような行動をとる児童や，排他的な行動をとる児童の割合が少ないことが示された（CSR Research Consortium, 2000）。
理論研究	小規模学級ほど学級への帰属意識が高まり学習に積極的に取り組むようになるのではないか	• 学級規模に関する先行研究の結果を踏まえながら以下２点についての指摘 • 小規模学級の方が児童生徒が積極的に学習活動に参加できる機会が増え，学習活動により積極的に取り組むようになる。教師にとっては児童生徒個人の学習の進み具合を見たり必要な支援を行う時間が増えることとなる。これらのことが実現すると，より多くの児童生徒が学級集団において尊重される存在となり得る。 • 学級規模を縮小することでグループ学習を行う際のグループをメンバー全てが学習活動に参加できる程度の小集団で編制することが可能となるとともに，学級に属する児童生徒数が少ないと学級全体で学習活動に取り組む際にもより多くの児童生徒が積極的に取り組むことが可能となることに加えて，グループ学習の成果を学級全体で共有することもやりやすくなるというように，協同的な学習が実現しやすくなることも，学級への帰属意識を高めることにつながる。		

（1） 学年の学級数と学級規模が生徒の家庭学習の取り組みの変化に与える影響

家庭学習
（宿題をしている
宿題以外の家庭学習をしている）

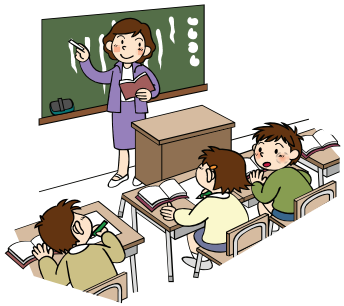


21～33名
学級
（48校）

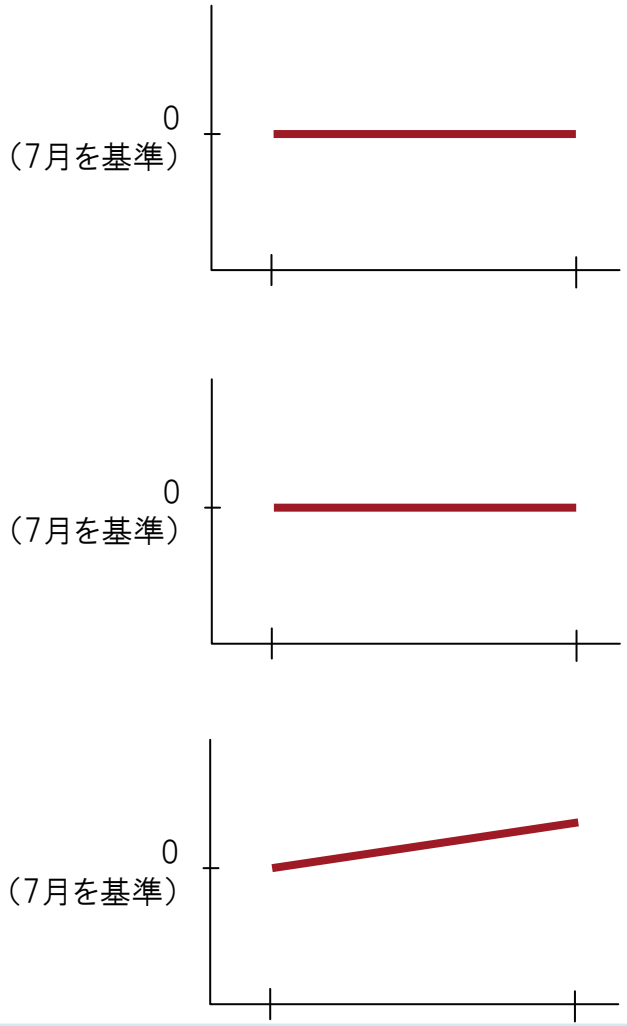
義務標準法による試算上第2学年の学級数が2学級以上かつ学級あたりの生徒数が34人以上となる中学校

37名以上
学級
（18校）

33名超
37名未満
学級
（22校）



33名以下
学級
（8校）



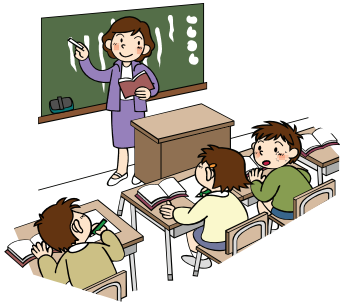
平成20年度
（第1学年時）

平成21年度（第2学年時）

- 7月から1月にかけての家庭学習の様子に変化に対する学年の学級数の影響は見られない。
- 学級規模が33名以下の学校の生徒は，7月よりも1月の方が家庭学習によく取り組むようになった。
- 33名を超える学級規模の学校の生徒においては変化は見られない。

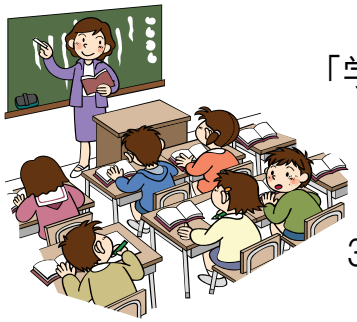
（2） 学級規模と教師ー生徒関係

学年主任対象の調査結果のうち
「学年全体として生徒が先生方に何でも話せる雰囲気がある」
という項目に「あてはまる」と回答した学校の割合

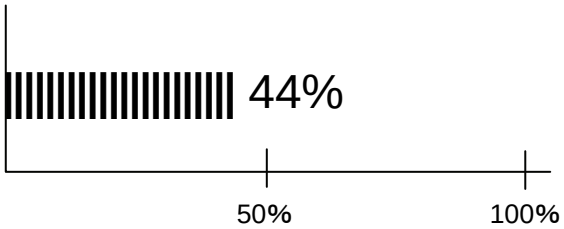


21～33名
学級
（48校）

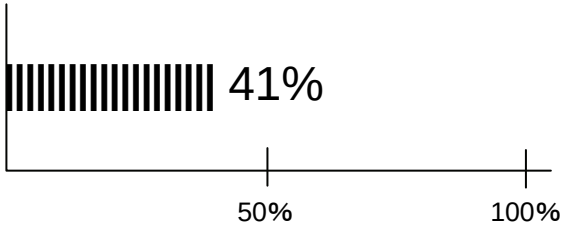
義務標準法による試算上第2学年の学級数が2学級以上かつ学級あたりの生徒数が34人以上となる中学校

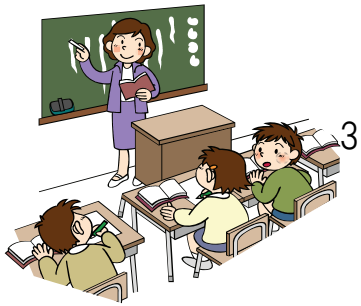


37名以上
学級
（18校）

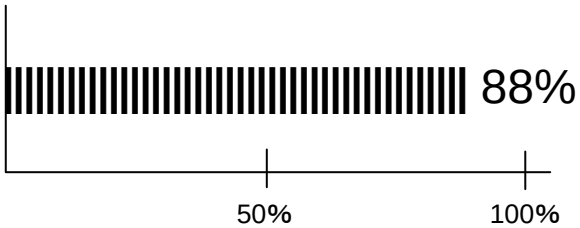


33名超
37名未満
学級
（22校）





33名以下
学級
（8校）



平成20年度
（第1学年時）

平成21年度（第2学年時）

- 37.0名以上の学級規模の学校と比較すると平均学級規模33.0名以下の学校において，学年全体として生徒が先生方に何でも話せる雰囲気がある。
- 学級規模が小さいほうが，教師ー生徒関係が良好ではないかと考えられる。

3. 学年の学級数・学級規模がクラス替えによる生徒指導上・人間関係的問題の解決に与える影響

（1） 背景・問題・仮説

クラス替えの実際

① 学年所属教員全員で話し合ったうえで生徒個人別カードに以下の事項を記載

- 学年全体に影響を及ぼすほどの問題行動を起こすか
- 学級全体に影響を及ぼすほどの問題行動を起こすか
- 身体状況，不登校，不登校傾向，孤立傾向，その他配慮の要不要
- 学力，得意な運動種目，ピアノを演奏できるか
- 保護者が学校や教師に苦情を寄せる傾向の有無
- 学年全体をまとめられる程度のリーダー性の有無
- 学級全体をまとめられる程度のリーダー性の有無
- 上記以外の理由で同一学級にしてはいけない生徒の有無
- 同一学級にすべき生徒の有無

② 以下の事項にあてはまる生徒を別学級にする

- 学年全体に影響を及ぼすほどの問題行動を起こす
- 学年全体をまとめられる程度のリーダー性がある
- 同一学級にしてはいけない生徒がいる

③上記①の項目についてバランスがとれるようにそれぞれの生徒が所属するクラスを決定する。

一緒にしてはいけない組み合わせ

	B	b	d	e	g	j	m	n	r	s	t
A	○										
M									○		
N											○
a		○									
c			○	○							
e							○	○			
f					○						
h					○	○					
k							○				
m											○

一緒にした方がよい組み合わせ

	D	E	F	H	K	n	o	q
C	○	○	○					
G				○				
J					○			
h						○	○	
p								○

英大文字：男子　英小文字：女子

ある中学校のある学年では一緒にしてはいけない組み合わせが13通り（37名×4学級）

指摘されている事項

中教審で・・・

- 学年の学級数が多いとクラス替えがしやすいことなどから，豊かな人間関係の構築や多様な集団の形成が図られやすいといった利点がある 。

予備調査で・・・

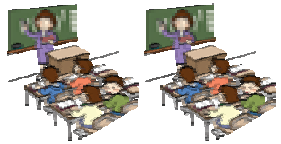
- 学年の学級数が複数であるとクラス替えができるため，クラス替えができるよう，各学年複数の学級が設置できるとよいという意見が多い。
- 規模の小さい学校（例えば単学級）では人間関係が固定しがちであり，子どもが友人関係でつまずくと行き場が無くなってしまうことがある。
- クラス替えを行うことで学級内の人間関係を良好に保つことにつながり，学習活動が成立しやすくなるのではないか。
- ある生徒にとって同一学級に所属させると生徒指導上不都合が生じると思われる別の生徒が同一学年にいた場合でも，両者を同一学級に所属させないようにクラス替えができるため，生徒指導上の問題や生徒どうしの人間関係にかかわる問題が解決しやすい。

仮説

- 「同じ学級に所属させると生徒指導上不都合が生じると思われた生徒」が同じ学年の中にいた生徒にとっては，**学年の学級数が多いと**生徒指導上の問題や，生徒どうしの人間関係にかかわる**問題が解決しやすい**。
- 「同じ学級に所属させると生徒指導上不都合が生じると思われた生徒」が同じ学年の中にいた生徒にとっては，**学級規模が小さい方が**生徒指導上の問題や，生徒どうしの人間関係にかかわる**問題が解決しやすい**。

3. 学年の学級数・学級規模がクラス替えによる生徒指導上・人間関係的問題の解決に与える影響
（2） 方法

調査対象



学級数：2～4
学級規模：37名未満
（14校）

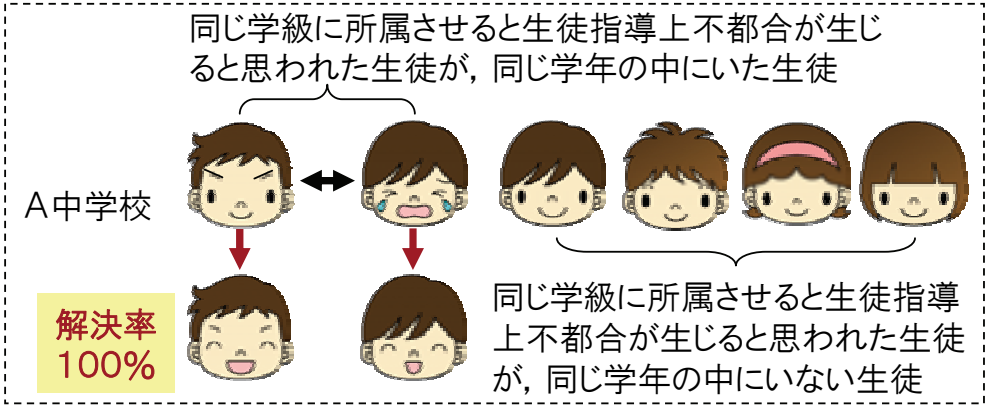
学級数：2～4
学級規模：37名以上
（10校）

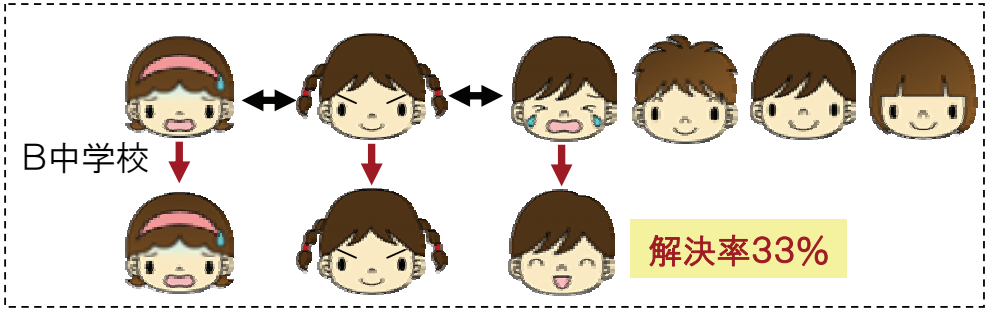
学級数：5～7
学級規模：37名未満
（8校）

学級数：5～7
学級規模：37名以上
（7校）

比較の条件をそろえるため
学級規模33名以下の学校は除外

解決率の算出





「クラス替えを行ったことで，この生徒の生徒指導上の問題や，生徒どうしの人間関係にかかわる問題が解決した」割合を学校ごとに求める。

学校名	学級数	学級規模	解決率
A中学校	5	25	56%
B中学校	4	36	24%
C中学校	4	28	68%
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・

- データが得られた5818名のうち，「同じ学級に所属させると生徒指導上不都合が生じると思われた生徒」が同じ学年の中にいた生徒は748名（12．9%）。
- 40校中1校は「同じ学級に所属させると生徒指導上不都合が生じると思われた生徒」が同じ学年の中にいた生徒がいなかったため分析から除外。